

平成29年度 学校経営要綱

1 本校経営の基盤

- 日本国憲法および教育基本法をはじめとする関係諸法規、小学校学習指導要領、福岡県および八女市の教育施策に基づいた山間へき地極小規模校の特色ある学校経営や教育活動を推進する。
- 「2030年の社会と子ども達の未来」を展望し、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していくための資質や能力を身につけていく教育活動を展開する。

2 本校の教育目標

ふるさと矢部を愛し、すすんで、なかよく、たくましく伸びていく子どもの育成

3 めざす学校像

- 子どもが楽しく学ぶ学校
 - 保護者が信頼する学校
 - 地域が応援したくなる学校
- 子どもも保護者も地域も大好きな矢部小学校

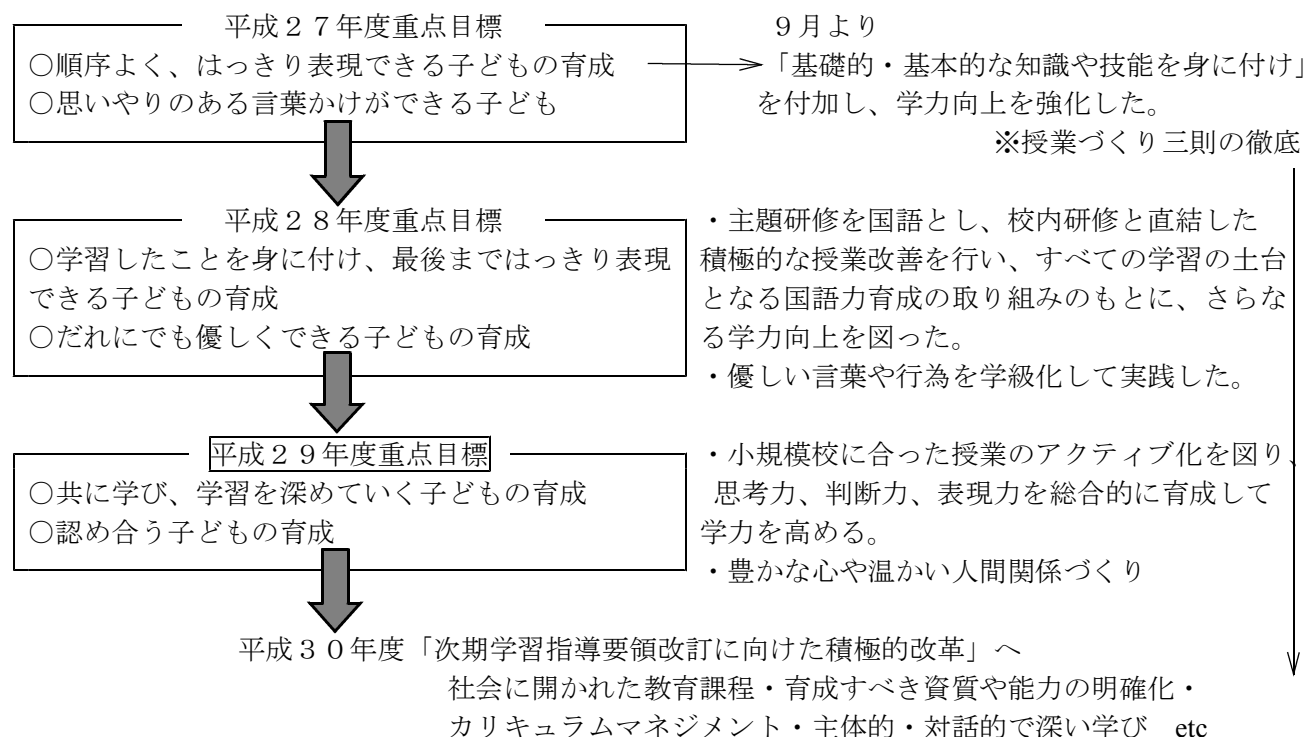
4 めざす児童像

- すすんで、めあてに向かって取り組む子ども (知)
- なかよく、心のふれあいを深める子ども (徳)
- たくましく、明るくすこやかに伸びていく子ども (体)

5 めざす教師像

- 授業を大切にする教師
 - 学び続ける教師
- 子ども達に求められる資質や能力を育成するために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていく教師のことである。

6 中期学校教育目標 (平成27年度～29年度)



7 昨年度の重点目標の達成状況と反省

教育課題を解決するために設定した二つの重点目標に関して、検証方法をもとに毎月の評価や情報交換等で小サイクルのPDCAを重ね、達成状況を下記のように考察した。

重点目標①「学習したことを身につけ、最後まではっきり表現できる子ども」について

「学習したことを身につけ」に関しては、単元テストの80点以上の人数を見ると、学年や単元によって差はあるが達成できている人数が増えてきており、指導の成果が上がっている。しかし、80点以下の子どもが固定してきており、個人差の広がりには課題がある。低学力の子どもや配慮が必要な子どものための個別指導が一層重要である。

「最後まではっきり表現」に関しては、学年の差を考慮しながらも全学年が「最後まではっきり表現する」ことを同一目標として取り組んだ。どの学年も自ら発表できる子どもとあまりできない子どもの差があり、まず全員が発表することに課題がある。全学年一桁という少人数の学習環境にあって、多様な発表で学習を活性化するのはなかなか難しいが、思考・判断・表現をつなげていく学習の場の工夫と体験の積み重ねが必要である。そのためには、「考える・書く・話す・聞く」等の言語活動がいっそう重要となる。

重点目標②「だれにでも優しくする子どもの育成」について

学習面では、支持的・共感的な学級風土づくりの土台として「思いやりのある学習五項目」をもとに、全学年共通に取り組んだ。また、優しい言葉や行為を学級化してそれぞれに実践してきた。情報交換や毎月の評価を通して子どもの様子を見ると、学習の場においては成果が出てきているが、日常生活の中では相手を思いやる優しい言葉や行為ができずにけんかやもめごとが起こることも多々ある。「だれにでも優しくする子ども」や「認め合える子ども」が増えるよう、今後も指導を積み重ねていく必要がある。

8 教育課題・経営課題

(1) 教育課題

- 学力向上のための取り組みを組織的に積み重ねてきた結果、基礎的な知識・理解（いわゆる A 学力）も活用する力（いわゆる B 学力）も徐々に向上してきており、全国や県の平均を上回るようになった。しかし、理由や根拠の説明能力や要約、関係づけ、情報処理等の力はまだまだ十分ではない。学年差や個人差、教科の領域差も大きい。
- 集会や行事等での発表は必ず手が挙がるようになったが、全学年発表できることは少ない。また、学習中課題に沿って意見交換をしたり結論に導いたりするための交流力（思考・判断・表現）は、十分身に付いていない。
- 家庭における自主的な学習や「寝る時間」「メディア使用時間」等規則正しい生活が習慣化していない子どもがいる。
- 優しい心や行為が大事であることは十分理解しているが、日常生活においては相手の弱点や苦手な部分に目がいき傷つけてしまう言動がある。お互いを肯定する態度を高めていく必要がある。
- 未来を担う存在として、ふるさと矢部の自然や産業・歴史・文化についての知識や体験を一層深めていく必要がある。

(2) 経営課題

- 教頭欠を補完する組織や校務分掌再編による、「チーム矢部小」の体制を整え、機能させる。
- 今後の学校の在り方を見据えた小中連携の強化と接続を意識した学校経営をする。
- 極小規模校のよさや特色、「少ない」ことを生かす発想を大事にした学校経営をする。
- 本校独自の指導体制を工夫し、単式指導（主要4教科）と複式・合同指導（技能教科）のそれぞれのよさを生かした効果のある授業に取り組む。

9 本年度の重点目標・意味・目指す姿

昨年度の評価反省・教育課題・経営課題を踏まえ、重点目標①は、子どもが主体的に学習していく面から、重点目標②は、いじめ防止や人権教育とも深い関わりのある心の育成の面から下記のように設定する。重点目標①と②は別々に機能するのではなく、相乗的に効果が得られると考えている。

重点目標① 共に学び、学習を深めていく子どもの育成

【重点目標①の意味】

「共に学び」とは

- 課題を共有し、その解決に向けお互いの考えを関わらせながら、個や集団が主体的に思考・判断・表現していく過程を指す。

「学習を深めていく」とは

- 個や集団が、主体的に思考・判断・表現を繰り返しながらよりよい考えを導き、その積み重ねにより各教科等の特質に応じた「見方・考え方」や基礎学力を身につけていくことである。
(※基礎学力とは、学習指導要領に示されている知識や技能を指す。)

「共に学び、学習を深めていく子ども」とは・・・(目指す子どもの具体的な姿)

- 課題(めあて)に照らしてしっかり考え、判断し、その過程や結果を表現しあうことができる。
- なぜそうなるのかがわかり、学習の成果(まとめ)を共有することができる。
- 各単元で身につけるべき知識や技能を8割以上習得している。(単元テスト80点以上)

重点目標② 認め合う子どもの育成

【重点目標②の意味】

「認める」とは、

- 他者のよいところだけではなく違いや誤り、苦手なことまでを受け入れ、肯定的な言葉や態度(行為)で表すことである。

「認め合う」とは、

- 「認め」「認められる」温かい人間関係のことである。同学年だけではなく本校児童全員の相互関係を指し、自分と他者すべての関係性において、「認め」「認められる」言葉や態度(行為)が日常的に行き交っていることである。

「認め合う子ども」とは・・・(目指す子どもの具体的な姿)

- 肯定的な言葉や態度(行為)を発信しあうことができる。
- 「思いやりのある学習五項目」を学習においても生活においても実践することができる。

10 重点目標達成のための方策

(1) 教育活動「土台づくりとアクティブ化」・・・アクティブ化は土台があるからできる

- 学習においても生活においても凡事と基本を徹底し、育成すべき資質や能力の土台を固める。
- 学習においても生活においても思考し判断し表現する場をつくり、体験を積み重ねて質的に深める。
- 授業づくり三則・思いやりのある学習五項目・重点目標の学級化を通して、校内研修や生徒指導・学級経営と密接に関連させて実践を積み重ねる。帰りの会では、学級化した重点目標を振り返る項目を入れ、自分や学級を評価させる。
- 学校・家庭・地域及び中学校との連携・協力を一層強め、9ヵ年を見通した教育の意識化を図る。

授業づくり三則の実践 「めあてにつなぐまとめがある」
「全員が手を上げる場がある」
「交流の明確なゴールがある」

思いやりのある学習5項目の実践（最後まで聞く・間違いを笑わない・
わからないところを一緒に考える・できたことを一緒に喜ぶ・認め合う）

重点目標の学級化（例）

- 共に学び、学習を深めていく子ども
 - ・前の人につなげて発表することができる
 - ・発表に対して全員が反応することができる
 - ・学習を振り返り自分でまとめを書くことができる
- 認め合う子ども
 - ・素直に褒めあうことができる。
 - ・「ありがとう」「ごめんなさい」「いいよ」が言える。

(2) 組織・運営「チーム矢部小」・・・全員で取り組み全員で成果を上げる。

- 校長の指導のもと主幹教諭が組織を運営し、全員で補完しあって活性化に努める。
- 全員で決め（P）全員が必ず行い（D）、全員で評価して（C）全員で改善する（A）。
- 一役一人の校務分掌を責任を持って遂行し、分掌以外のことも全員が率先して行う。
- 報告・連絡・相談をしっかりと行い、少ない職員数での校務・業務を効果的に遂行する。
- 学校内外（職員と、子どもと、保護者と、地域と、中学校と、保育園と、他校と・・・）での、積極的な受信・発信に努め、つながりを深めて組織運営や教育活動に生かす。

(3) 教育環境「プラスの環境づくり」

- 教師自身がプラスの人的環境となり、肯定的な言葉や賞賛、評価を発信する。
- 学習の足跡や評価の残る作品・写真等を、季節や学習に応じて計画的に掲示する。
- 全校統一の目標や啓発物は必ず掲示する。（重点目標・思いやりのある学習・あいさつ名人・他）
- 学級が躍動する学級独自のシステムやルールをつくる。
- いつもきちんと整理し、学習しやすい美しい教室環境を保つ。

(4) 人材育成「自己改革」・・・自分で自分を育成する

- 校内外研修や自己研鑽・自主研修を通して、教師自ら次期学習指導要領改訂に対応できる資質・能力を身に付ける。
- 年代の枠を越え職員どうして学び合い、積極的に自分育てに取り入れる。
 - ・コミュニケーションを深め、気軽に相談や助言のできる関係をつくる。
 - ・お互いに教室を開き、質の高い授業や教室環境づくりを学ぶ。

(5) その他の努力点

- 集会や朝礼では、必ず子供に思考・判断・表現させる場をつくり、考えることや表現することが当たり前の雰囲気をつくる。
- 集会や朝礼では、随時重点目標と関連づけた話や評価をして、意欲と実践の継続を図る。また、ふるさと矢部の「ひと」「もの」「こと」についての話を可能な限り行う。
（例：南北朝の話・江崎済先生の話・白馬の媛の話・千本桜の話）
- 他者との交流を活性化する活動を積極的に企画・実施する。
（異学年・高齢者や園児等の異世代・地域内外・他校・専門家の招聘など）
- 中学校の出前授業の年間計画を作成し、効果的に実施する。
- 個人カルテで子どもの育ちや課題、配慮点をつなぎ9ヵ年を見通した指導に生かす。

1.1 重点目標達成状況の検証

(1) 様々な観点から下表のように達成状況を評価し、改善に生かす。

	評価内容	最終数値目標	評価者	評価時期
1	共に学び、学習を深める姿	学級化した姿8割以上	担任	毎月
2	認め合う姿	学級化した姿8割以上	担任	毎月
3	授業づくり三則	全指導者の平均が3.0以上	指導者	毎月
4	単元テスト	80点以上の子どもが8割以上	指導者	単元ごと
5	学年末標準学力検査	全学年が全国平均+2～5P以上	市販	12月
6	ハイパーQUテスト	満足群の子どもの増加	市販	前・後期

重点目標①・・・1・3・4・5で評価 重点目標②・・・2・6で評価

(2) 校長や主幹が提示する上記評価結果のデータをもとに、研修や会議を通して全員で検証する。

1.2 教育課程の編成について

○諸法令や学習指導要領の示すところに従い、本校児童の人間として調和のとれた育成を目指し、適切な教育課程を編成する。

○次期学習指導要領の改訂を見据え、内容・方法等移行できるところは積極的に取り入れる。

○昨年度の成果と課題を明らかにし、本年度の重点目標の達成と地域や学校の特色を生かすことを踏まえて教育課程を編成する。

○「八女ふるさと学」及び福岡県教材集の指導を教育課程に位置づけ確実に実践する。

○2学年まとめて指導する教科等においては、A年度B年度のカリキュラムを編成し、同単元(主題)同目標(場合により異目標)異程度の指導体制を取る。未履修のないよう十分留意する。

○重点単元を適切に選択し、量的加配と質的配慮を行う。

(1) 重点を置く教科と領域

- 国語・・・「読む」「話す・聞く」
- 算数・・・「数と計算」

(2) 道徳教育の重点

- ◎勤勉・努力(重点目標①より) ◎思いやり・親切(重点目標②より)
- 郷土愛(特色ある学校づくり及び八女市の教育施策より)
- ※特別の教科「道徳」へ、内容・方法等を段階的に移行していき質的転換を図る。

(3) 生活科・総合的な学習の時間の重点

- 矢部村の価値ある教育資源を「ふるさと体験学習」として、各学年の系統性に配慮して取り入れる。
- 横断的・総合的な学習を探究的に行うことにより、課題解決の能力を育成する。
- 単発的な体験活動に終わらず、単元ごとに学習の足跡を記録しファイルしていく。
- 矢部保育園及び市内小学校の体験留学を呼びかけ、本校との交流学習を行う。
- 浮立及び公卿唄の伝承活動を全学年で行う。

(4) 特別活動の重点

- 少人数での児童会活動のあり方を工夫し、活性化させる。
 - ・クラブ活動を3年生以上で行う。
 - ・委員会活動を4年生以上で行う。
- 学級活動の内容を、(1)ーウ 学校における多様な集団の生活の向上
(2)ーウ 望ましい人間関係の形成
に重点を置いて指導し、いじめのない学校づくりの実現に資する。
- 学級活動(1)に関わる話し合い活動を計画的に行い、自治的活動を活性化すると共に話し合う力をつけていく。

※学力向上について

(1) 学力の実態（平成28年度）

28年度の全国学力検査（6年7名）では、国語 AB 算数 AB すべてにおいて全国平均を上回り、大きな成果を得ることができた。県学力検査（5年5名）においても、国語・算数とも県平均を上回り、八女市全体との比較でも平均以上であった。

また、学年末の全学年対象の標準学力検査（東書）では、1年生を除くと、どの学年も全国平均を大幅に上回り大きく向上した。日々の授業改善と共に「発揮力」育成のため復習と過去問題に繰り返し取り組んだ成果であると考えている。領域別に見ていくと、国語は「読む」「話す・聞く」、算数では「数と計算」について一層の重点を置き、指導していきたいと考える。

（※標準検査の結果については、「矢部小学校の実態」のページに記載している。）

(2) 学力向上に向けた取り組み

共通理解と実践の徹底

①に授業改善 ②に補充学習 ③に家庭学習
の充実に向け「みんながやる」・「つづけてやる」

ア 授業改善のための校内研修の強化・・・研究主任（兼学力向上C）

主題研修

- ワークショップ・講師招聘による指導案審議を一層充実させる。
- 授業においては、授業づくり三則「めあてとまとめ」「全員挙手の場」「交流の明確なゴール」を意識して実践する。
- 授業づくり三則を日常化するための教室訪問と指導（校長・主幹）
- 授業づくり三則に関する毎月の自己評価（担任及・教科担任）
数値平均等提示（校長）

学力向上に関する研修

- 全国学力・県学力検査に関わる研修
 - ・実施直後の自校採点と指導（担任・教科担任）
 - ・結果と分析（校長・主幹）
 - ・問題解答、要因や改善についての協議（全員）
 - ・以後の取り組みの提示（主幹・研究）・指導（担任・教科担任）
 - ・保護者への説明と学校通信・HPを通しての公表（校長）
 - ・昨年度の問題による事前実施（3月上旬5年生）
 - ・過去問題の配布（学年末休業の課題）、回収・採点・指導（4月担任）
- 単元テストの80点以上の人数調査（担任及び教科担任）・結果提示（校長）
- 後期に向けての学力向上プランの修正（主幹・研究）

イ 補充学習の取組→「朝の定着の時間」の見直しと改善・・・主幹・研究主任

- 国算中心に計画的に行い、国語には視写や音読も取り入れスキルアップを図る。
- 担任外指導者をローテーションさせ、全教員で組織的に指導する。

- 5・6年生は教材集 A の指導を行う。B は、教育課程に位置づける。(主幹)
- 全校統一のファイルに国語・算数別に綴じさせ、学習の足跡や積み上げがはっきり見えるようにする。
- 放課後学習 (※市の支援事業最終年度) を継続する。
(校長・主幹・地域の学習支援員)

ウ 家庭学習の指導→効果のある自学の仕方・・・研究主任

- 自学充実についての提案 (研究)
 - ・内容 ・ノートの形式 ・担任の評価の仕方 ・よいノートの紹介等
- 自学の啓発と意欲化についての話 (校長)
- 曜日別自学点検・個別コメント (校長) ※それ以外の日は担任が点検
- 学校通信による自学強化の発信と家庭への啓発・協力要請 (校長)
- 年2回の家庭生活や家庭学習についての実態調査 (主幹)
- 中学校からの出前授業「中学校の学習」「家庭学習の大切さ」(中学校教諭)

エ 学習規律や学び方の指導・・・主幹教諭

- 「学習規律等」についての提案 (主幹)
 - ・共通指導項目を絞って重点化する、
 - ・全学級が掲示して指導を徹底する。
- 点検と指導を繰り返す。(担任・教科担任)

オ その他学校として取り組みたい改善策・・・各担任・図書司書

- 「朝の読書」で読む本を文字中心にする。各自前日までに本を借り、すぐに読めるように準備しておく。朝読の時間には巡回し、読書の質を把握する。
(※絵本・図鑑・漫画・趣味本等は、朝活以外で読ませる。)
- 各学年の課題図書 (おすすめの本) を8割以上読ませる。